

(2) 企画展

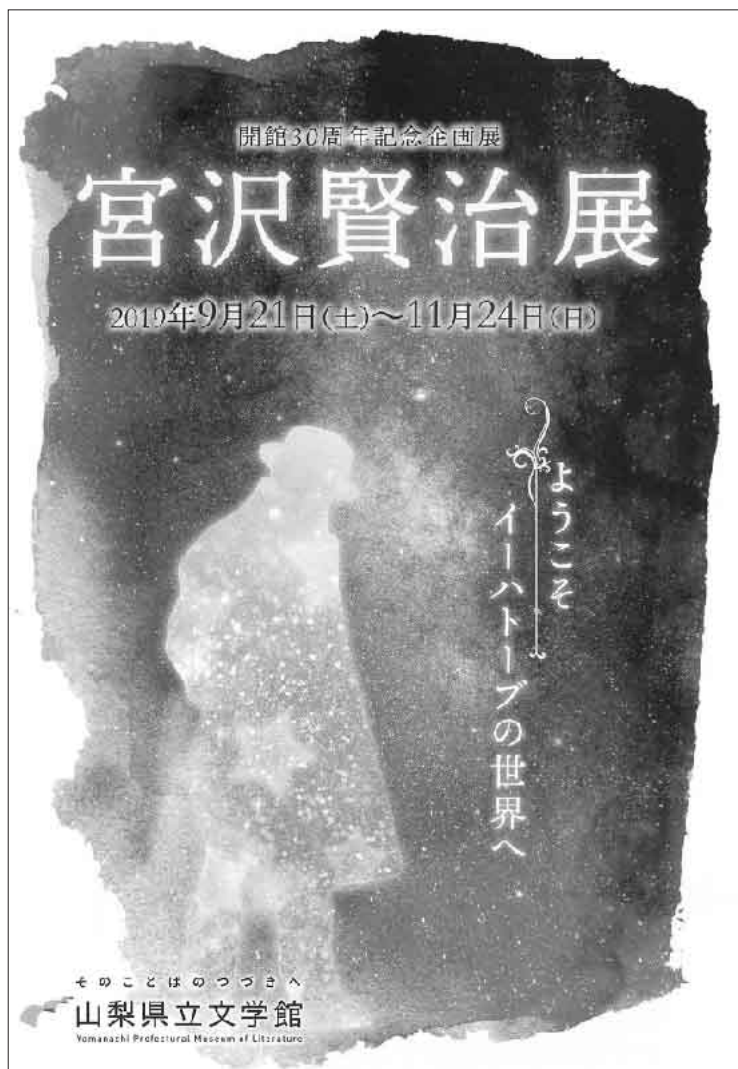
開館30周年記念企画展「宮沢賢治展 ようこそイーハトーブの世界へ」

期 間 令和元年9月21日（土）～11月24日（日） 56日間

趣 旨 日本文学史の中で詩、童話に独自の世界を切り開き、現在も多くの愛読者を持つ宮沢賢治（1896～1933）。宮沢賢治は故郷岩手を「イーハトーブ」と呼び、理想郷として作品に描き出した。そこには、故郷への愛着とともに、すべての生命を尊び共存を目指そうとする理想が映し出され、現代への普遍的な問いがこめられている。本展では、賢治の遺した詩、童話や山梨の友人保阪嘉内宛の手紙など約120点の資料により、作品の魅力や、賢治の掲げた理想の世界を紹介した。

編集委員 栗原敦（実践女子大学名誉教授） 長野まゆみ（作家）

展示構成 I 宮沢賢治 軌跡
II 作品の世界



(3) 特 設 展

① 開館30周年記念特設展「太宰治 生誕110年 ―作家をめぐる物語―」

期 間 平成31年4月27日（土）～令和元年6月23日（日） 51日間

趣 旨 太宰治（1909～1948 青森県生まれ）の作品は、色褪せない魅力を放ち、今も多くの読者を得ている。その生涯は、様々な人々との関わりや出来事が織りなす物語に彩られている。第一創作集『晩年』の刊行には、友人の檀一雄の尽力と、編集者・浅見淵へ宛てた太宰の必死の懇願があった。1939年1月の石原美知子との結婚は、井伏をはじめ、井伏の弟子・高田英之助の婚約者とその両親などの配慮により実現した。
本展では、作品だけでは窺い知ることのできない太宰をめぐる物語を、所蔵資料を中心に紹介した。

展 示 資 料 一 覧

初公開資料

佐佐木茂索宛献呈本『晩年』1936（昭和11）年6月 砂子屋書房 個人蔵

青森中学校・弘前高等学校

芥川龍之介「西洋史」ノート

上京・東京帝国大学入学

「細胞文藝」創刊号

デビューの頃

浅見淵宛書簡 1935（昭和10）年11月17日消印
浅見淵宛書簡 1935（昭和10）年11月18日消印
浅見淵宛書簡 1935（昭和10）年11月22日
浅見淵宛葉書 1935（昭和10）年11月30日消印
浅見淵宛葉書 1935（昭和10）年12月12日消印
浅見淵宛葉書 1936（昭和11）年2月10日消印
浅見淵宛葉書 1936（昭和11）年2月13日
浅見淵宛葉書 1936（昭和11）年2月28日
浅見淵宛葉書 1936（昭和11）年3月2日消印
浅見淵宛葉書 1936（昭和11）年3月24日消印
浅見淵宛葉書 1936（昭和11）年4月7日消印
浅見淵宛葉書 1936（昭和11）年4月28日消印
浅見淵宛葉書 1936（昭和11）年6月4日消印
浅見淵宛葉書 1936（昭和11）年8月25日消印
井伏節代宛葉書 1936（昭和11）年12月8日消印
井伏鱒二宛書簡 1936（昭和11）年9月
井伏鱒二宛書簡 1936（昭和11）年9月15日消印
「陰火」原稿
檀一雄「おめざの要る男」原稿
井伏鱒二「太宰君」原稿
保田與重郎「佳人水上行」原稿
佐藤春夫「尊重すべき困った代物―太宰治に就て―」原稿
「細胞文藝」創刊号 1928（昭和3）年5月
「細胞文藝」1928（昭和3）年7月
「海豹」創刊号 1933（昭和8）年3月

「鶴」第1輯 1934（昭和9）年4月
「鶴」第2輯 1934（昭和9）年7月
「青い花」創刊号 1934（昭和9）年12月
「日本浪漫派」第1巻第3号 1935（昭和10）年5月
「文藝雑誌」創刊号 1936（昭和11）年1月
『二十世紀旗手』1937（昭和12）年7月 版画荘
『晩年』1936（昭和11）年6月 砂子屋書房
『虚構の彷徨 ダス・ゲマイネ』1937（昭和12）年6月 新潮社
マルセル・ブルースト『スワン家の方』1931（昭和6）年7月 武蔵野書院

再生の地—山梨

井伏鱒二宛書簡 1938（昭和13）年8月11日
井伏鱒二宛葉書 1938（昭和13）年9月30日消印
井伏鱒二宛書簡 1938（昭和13）年10月25日消印
地下足袋断片
『皮膚と心』1940（昭和15）年4月 竹村書房
『駆込み訴へ』1942（昭和17）年1月 月曜荘私版
『正義と微笑』1942（昭和17）年6月 錦城出版社
『新ハムレット』1941（昭和16）年7月 文藝春秋社

戦後の活躍

岩月英男宛葉書 1946（昭和21）年（推定）8月23日消印 個人蔵
岩月英男宛葉書 1947（昭和22）年5月1日 個人蔵
日本出版協会宛書簡 1947（昭和22）年4月21日 個人蔵
領収證 1947（昭和22）年5月3日 個人蔵
「あとがき」原稿 個人蔵
「ヴィヨンの妻」原稿
「創作年表」
「斜陽」草稿
山田貞一画『女生徒』表紙原画
灰皿 個人蔵
『右大臣実朝』1943（昭和18）年9月 錦城出版社
「朝日新聞」1948（昭和23）年6月16日
『津軽』新風土記叢書 1944（昭和19）年11月 小山書店
『薄明』1946（昭和21）年11月 新紀元社
『ヴィヨンの妻』1947（昭和22）年8月 筑摩書房
『桜桃』1948（昭和23）年7月 実業之日本社
『斜陽』1947（昭和22）年12月 新潮社
『人間失格』1948（昭和23）年7月 筑摩書房
『グッド・バイ』1949（昭和24）年6月 八雲書店
『パンドラの匣』1946（昭和21）年6月5日 河北新報社 個人蔵
『パンドラの匣』1947（昭和22）年6月 双英書房
「アサヒグラフ」1948（昭和23）年7月14日号 個人蔵
『惜別』1945（昭和20）年9月 朝日新聞社
『お伽草紙』1945（昭和20）年10月 筑摩書房
「新潮」第44巻第7号 1947（昭和22）年7月
バー「ルパン」にて 1946（昭和21）年12月 撮影 林忠彦 個人蔵

回想・太宰治

- 津島美知子 早川徳治宛葉書 1948年（推定）7月28日
- 津島美知子 早川徳治宛葉書 1948年（推定）7月頃日不明
- 津島美知子 早川徳治宛葉書 1948年（推定）8月14日消印
- 津島美知子 早川徳治宛葉書 1948年（推定）8月21日
- 津島美知子 早川徳治宛葉書 1948年（推定）8月28日
- 津島美知子 早川徳治宛葉書 1948年（推定）9月12日
- 津島美知子 早川徳治宛葉書 1948年9月（推定）22日消印
- 津島美知子 早川徳治宛葉書 1948年10月（推定）8日消印
- 津島美知子 「父のこと、兄のこと」原稿
- 津島美知子 「蔵の前の廊下」原稿
- 津島美知子 「小館家の人々」原稿
- 津島美知子 「南台寺」原稿
- 井伏鱒二 津島美知子宛書簡 1952（昭和27）年12月1日
- 亀井勝一郎 「解説」原稿
- 太宰治御坂峠文学碑「富士には月見草がよく似合ふ」原稿
- 太宰治御坂峠文学碑拓本軸装
- 伊馬春部 「刃渡りの果」原稿
- 武田泰淳 「小事」原稿
- 坂口安吾 「太宰治情死考」原稿



山梨県立文学館 開館30周年記念特設展

安吾が著したやまなほ

作家をめぐる物語



太宰治 生誕110年

2019年 4月27日(土)～6月23日(日)

『文豪ストレイドッグス』展示コーナーあり。
ポスターなどのノベルティはごさいません。


山梨県立文学館
Yamanashi Prefectural Museum of Literature

② 開館30周年記念特設展「山と水の文学」

期 間 令和元年7月13日（土）～8月25日（日） 39日間

趣 旨 富士山、南アルプス、八ヶ岳など、豊富な水源を有する山々に囲まれた山梨県。その奥深い自然は多くの文学者たちを刺激し、優れた小説・詩歌など文学作品を生み出す重要なテーマとなってきた。

本展では、山と水を主題にした文学作品をとりあげ、芥川龍之介の「暑中休暇日誌」（1908年）や飯田蛇笏「夏山や又大川にめぐりあふ」軸装、小島烏水の序文を付す茨木猪之吉「甲斐のやま山」画帖などのほか、県内の山岳写真パネルを展示した。

なお、展示室の一角に来館者から「山と水の思い出」を寄せてもらうコーナーを設置、会期中、264点が集まった。

展 示 資 料 一 覧

山と水をうたう

- 三好達治「山なミ遠二春はきて 辛夷の花八天上ニ 雲は彼方ニ帰れ共 帰るべしらニ越ゆる路」
会津八一「かみつけのくにかぎりとなつくものひまにもしろきほだかねのゆき 榛名山上にて 秋艸道人」軸装
田中冬二「海拔二千五百米の山頂のケルン」草稿
田中冬二 詩「山の水」書 寄託資料
若山牧水「山なだりなだらふ張りの四方に張りて静もりふかき富士の高山」軸装
田山花袋「はるゞと二荒たか原那須がねにふりつもりたる雪ぞさやけき」軸装 寄託資料
佐藤春夫「ふるさとの柑子の山を歩めども癒えぬなげきは誰がたまひけむ」短冊
田山花袋「山みちの雨にぬれたる草花はさながら妹のもすそ也けり」扇面
島崎藤村「洒落堂記」（芭蕉作）冒頭 色紙
尾崎喜八 詩「輪鋒菊」色紙
尾崎喜八「秩父やま雲立ちわきてみなつきの水の音涼し君といゆかむ」短冊
尾崎喜八「みすゞかる信濃の国のたかはらに人立てる見ゆ呼ぶとやすらむ」短冊
窪田空穂「甲斐のやまやへかさなるをたゞひとり離れて立てる塩の山かも」軸装 寄託資料
中村星湖「ふえふきの川瀬の音のひまひまに友呼ぶ声は千鳥なるらし」軸装 寄託資料
松村英一「湯のやどをあした立ち来て物見山のかたへは清き落葉まつ林」軸装 寄託資料
富安風生「赤富士に露滂たたる四辺かな」軸装
高浜虚子「やまの日は暑しといへど秋の風 山々のをとこぶり見よ甲斐の秋」軸装
飯田龍太「雪の峰しづかに春ののぼりゆく」軸装

山梨の山岳会 草創期 甲斐山岳会と白鳳会の機関誌

- 「山」第1年第1号1925（大正14）年5月20日 編輯兼発行人 平賀文男、発行所 甲斐山岳会 個人蔵
「白鳳」創刊号 1933（昭和8）年12月20日 発行人 小屋忠子、発行所 白鳳会

芥川龍之介の槍ヶ岳登山

- 芥川龍之介「暑中休暇日誌」1908（明治41）年7月21日～8月31日
芥川龍之介「槍ヶ岳紀行」ノート 1909（明治42）年8月8日～9日
芥川龍之介 俳句草稿「炎天や蝶をとめたる馬の糞」「夏蝶のひしと群れたる馬糞かな」他
芥川龍之介「槍ヶ岳に登った記」
芥川龍之介「水虎晩帰之図」額装 1923（大正12）年8月
「改造」1927（昭和2）年3月（「河童」掲載）
芥川龍之介「河童」草稿
芥川龍之介「蕩々帖」（河郎の歌部分）

飯田蛇笏の白骨温泉の旅

- 飯田蛇笏「白骨温泉紀行 夏山や又大川にめぐりあふ」軸装
「ホトトギス」第22巻第11号 1919（大正8）年8月（蛇笏「夏山や又大川にめぐりあふ」他掲載）

日本アルプス上高地・白骨温泉・浅間温泉御案内リーフレット

「俳句研究」第6巻第1号 1939（昭和14）年1月（蛇笏「上高地と白骨」70句掲載）

「雲母」第26巻第3号 1940（昭和15）年3月（蛇笏「焼嶽のある風景」掲載）

田部重治 笛吹川を溯る

田部重治「初めて登山した頃」草稿（「わがつれづれ草」ノート）個人蔵

田部重治「笛吹川の思い出」草稿（「日本風物誌」ノート）個人蔵

田部重治『紀行と随筆』1934（昭和9）年6月 大村書店 個人蔵（田部重治旧蔵書）

木暮理太郎 田部重治宛書簡 1934（昭和9）年6月13日 個人蔵

田部重治「笛吹川を溯る」碑文拓本（写真）個人蔵

木暮理太郎 田部重治宛はがき 1942（昭和17）年12月2日 個人蔵

田部重治『詩と断章』1942（昭和17）年11月 七丈書院 個人蔵（田部重治旧蔵書）

深田久弥 田部重治宛書簡 1935（昭和10）年1月30日 個人蔵

深田久弥『わが山山』1934（昭和9）年12月 改造社 個人蔵（田部重治旧蔵書・深田久弥献辞入り）

深田久弥『日本百名山』1964（昭和39）年7月 新潮社 個人蔵（田部重治旧蔵書・深田久弥献辞入り）

尾崎喜八「金峯山麓の記念碑」原稿

『山の憶ひ出』上巻 1938（昭和13）年12月／下巻 1938（昭和14）年6月 龍星閣

「霧の旅」第19年第54号 1944（昭和19）年10月 木暮理太郎先生追悼号 個人蔵（田部重治旧蔵書）

大町桂月の八ヶ岳登山

「間中至楽」折帖より 大町桂月「諸共にいさみて登る仏坂鶯さへも法華経となく 大正十二年夏 石井村長に導かれて鳳凰山に上る途中にて詠める」

大町桂月「ふもとより頂までも富士の根を背負ひてのぼる八が嶽哉 大正十三年夏 進藤村長清鑑 赤嶽を権現嶽の上に見て山らしき山に逢ひにける哉」軸装

井伏鱒二が川で会った人たち

飯田龍太 愛用の釣り竿

井伏鱒二 愛用の釣り竿・釣り道具

井伏鱒二「釣宿」原稿

「新潮」第67巻第5号 1970（昭和45）年5月（「釣宿」第2回掲載）

井伏鱒二「川で会った人たち」原稿

井伏鱒二「甲州北巨摩の大武川」草稿

山梨の釣り人たち

寺田重雄「肩通し」原稿

寺田重雄『甲州魚風土記』1980（昭和55）年12月 芸文社

宮田樞夫「石空川の山小屋」原稿 1935（昭和10）年12月末

宮田樞夫による魚拓（石空川、1953（昭和28）年4月23日）

野尻抱影が魅せられた雪形

小島烏水『日本アルプス』第1巻 1968（昭和43）年7月 前川文栄閣

野尻抱影 山寺仁太郎宛はがき 1967（昭和42）年6月12日 個人蔵

野尻抱影 山寺仁太郎宛はがき 1972（昭和47）年9月25日夜 個人蔵

野尻抱影 山寺仁太郎宛はがき 1972（昭和47）年9月27日朝 個人蔵

「中央線」第7号 1973（昭和48）年1月（野尻抱影「石楠花と駒鳥」掲載）

野尻抱影俳句「甲府暮春」「野呂川谷にて」額装 個人蔵

中村星湖—富士山とアルプス

中村星湖「アルプス登山の話」草稿

ツルゲエネフ作 生田春月訳『散文詩』1919（大正8）年4月25日三版 1917年6月18日初版 新潮社
「早稲田文学」第18号 1907（明治40）年5月（「少年行」掲載）
中村星湖「幸ひはこゝにこそすめ朝にたち夕かゝよふ富士やまの裾 昭和己亥新春」色紙
中村星湖「富士五湖の話」原稿
中村星湖「富士の残雪」原稿
中村星湖「剗の海—富士五湖の起り—」原稿

新田次郎の山への思い

新田次郎「富士と私」原稿
新田次郎「八ヶ岳の気象遭難」原稿
「オール読物」1962（昭和37）年11月号（新田次郎「偽りの快晴」掲載）
新田次郎「第二の古里 富士のもと生るも死ぬもこれ運命」色紙
新田次郎『強力伝』1980（昭和55）年2月 成瀬書房
新田次郎『芙蓉の人』1971（昭和46）年5月 文藝春秋
新田次郎『富士山頂』1981（昭和56）年7月第21刷 文藝春秋

描かれた山々

茨木猪之吉『山の画帖』1959（昭和34）年3月 朋文堂コマクサ叢書12 個人蔵（田部重治旧蔵書）
茨木猪之吉 画帖「甲斐のやま山」1935（昭和10）年12月末 序文小島烏水
茨木猪之吉 画帖「夏草甲州道中」1938（昭和13）年初秋題 木暮理太郎
足立源一郎「三峠」1953（昭和28）年 油彩
足立源一郎「初夏の甲斐駒 日野春にて」1970（昭和45）年 油彩
足立源一郎「瑞牆山新秋 富士見平にて」1966（昭和41）年 油彩
足立源一郎「八ヶ岳 赤岳と阿弥陀岳 甲斐大泉にて」1960（昭和35）年3月 油彩
足立源一郎『日本の山旅』1970（昭和45）年4月 茗溪堂
足立源一郎「利尻島遠望」原稿
足立源一郎 スケッチブック「立山 剣」より「室堂にて」「劔岳 別山硯池にて」
足立源一郎スケッチ「鳥海山」より「稲倉岳 四月二十五日 鳥海山ツタ（伝）石にて」「昭和十六年五月二十一日象潟にて 鳥海山」

ふるさとの山と川

山寺仁太郎『甘利山』2001（平成13）年3月 山梨日日新聞社
林 茂松「農牛」陶板 個人蔵
山寺仁太郎「エゴノキ」草稿 個人蔵
「中央線」第17号 1979（昭和54）年9月（山寺仁太郎「甘利山周辺 エゴノキ」掲載）
「中央線」第16号 1978（昭和53）年9月 野尻抱影先生追号

写真パネル

三枝仁也「お花畑と富士山」撮影場所 北岳・肩 7月
飯野金雄「すじ雲と五丈石」撮影場所 金峰山頂 12月
福島静雄「三条滝新緑」撮影場所 丹波山村・後山川 5月
津島隆雄「尾白川」撮影場所 北杜市白州町（千ヶ淵）春
津島隆雄「甘利山」撮影場所 韮崎市甘利山 夏
福島静雄「南アルプス大観」撮影場所 大菩薩嶺 2月
上野 巖「霧の鳳凰の滝」撮影場所 鳳凰山 小武川ドンドコ沢
上野 巖「甲斐駒にほむら立つ夕ぐれ」撮影場所 茅ヶ岳山麓にて
上野 巖「暗雲の夜明け」撮影場所 鳳凰山 薬師ヶ岳東面にて
上野 巖「巖冬の北岳」撮影場所 鳳凰山 観音ヶ岳にて
上野 巖「暮れなぞむ八ヶ岳と盆地の灯」撮影場所 境川町 名所山付近
上野 巖「雲広がる」撮影場所 甲斐駒ヶ岳から八ヶ岳

上野 巖「新雪の槍ヶ岳」撮影場所 常念岳より 11月
 上野 巖「大正池からの焼岳」撮影場所 上高地・大正池
 上野 巖「新雪の穂高連峰」撮影場所 徳本峠
 上野 巖「笛吹川東沢のナメ滝」撮影場所 笛吹川東沢
 上野 巖「笛吹川東沢の両門の滝」撮影場所 笛吹川東沢
 上野 巖「農鳥岳の農鳥」撮影場所 釜無川畔 2007年6月17日
 上野 巖「間ノ岳の農鳥」撮影場所 釜無川畔 2007年6月17日
 上野 巖「朝もやの展望」栗沢山から奥秩父連峰

ロビー展示

大森大一「笠雲富士倒影」撮影場所 富士河口湖・大石
 福島静雄「雲取山展望」撮影場所 雲取山 5月
 奥水忠比古「モルゲンロートの権現岳」撮影場所 八ヶ岳・赤岳 1月



③ 新収蔵品展 作家のエピソード

与謝野晶子・芥川龍之介・飯田蛇笏・中村星湖・津田青楓・武田泰淳ほか

期 間 令和2年1月25日（土）～3月22日（日）50日間

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、2月28日（金）から休室した。

趣 旨 令和元年に当館で新たに収蔵した、高浜虚子の句幅、芥川龍之介の句稿、飯田蛇笏の句短冊、井伏鱒二の手紙、太宰治の原稿など、約70点の資料を展示。文学作品や文学者の手紙などが書かれた背景にある様々なエピソードとともに、資料を紹介した。

展 示 資 料 一 覧

第四次「新思潮」創刊の頃

芥川龍之介 久米正雄宛書簡 1916（大正5）年9月（推定）

芥川龍之介と俳句

芥川龍之介 句稿

芥川龍之介「大正九年四月の文壇」草稿

石川淳「芥川龍之介全集に寄す」原稿

正岡子規の歌稿

正岡子規 歌稿 軸装

高浜虚子と新蕎麦会 高浜虚子「梅林に行く上下の渡舟哉」軸装

新蕎麦会 高浜虚子 選句稿 軸装 1946（昭和21）年8月31日

新蕎麦会 高浜虚子 選句稿 軸装 1948（昭和23）年11月23日

加藤楸邨

加藤楸邨「隠岐やいま木の芽をかこむ怒濤かな」軸装

加藤楸邨「ちぎりとり浴衣の裾のはぎ薄」軸装

加藤楸邨「雉子の眸のかうかうとして売られけり」色紙

加藤楸邨「鰯雲ひとに告ぐべき事ならず」色紙

秋山秋紅蓼

秋山秋紅蓼「うめのはな枝にひらきかほり来る朝」短冊

秋山秋紅蓼 画 梅図

秋山秋紅蓼「柳青し思出の人は亡くて古里」短冊

秋山秋紅蓼「鯉沢小学校の創立記念日式典によせて 文明や明治の春のあけぼのにまずさがけし鯉沢小学校」短冊

佐藤紅録「桐壺に筆とりそめつ青簾」短冊

秋山秋紅蓼「先生の一周忌を迎えて 紅緑忌ことしのつばめはや来たり」色紙

千家元麿「月懸けて竹豪放に見ゆるなり」短冊

荻原井泉水「小犬の曲った脚日暮を急ぐかな」短冊

飯田蛇笏

飯田蛇笏「山国新春」原稿

飯田蛇笏「蚊の聲や夜深くのぞく掛けかゞみ」短冊

飯田蛇笏「洪水の林の星斗秋に入る」短冊

飯田蛇笏「嶽の雪光」原稿

「雲母」の俳人たち

飯田龍太「山寒し年改まる三日前」短冊
松村蒼石「寒明の没日ひそかにかろくなる」色紙
石原八束「原爆地子がかげろふに消えゆけり」色紙
福田甲子雄「山国の秋迷ひなく木に空に」軸装
遠山壺中「人娶る日は金色に桐の花」短冊
丸山哲郎「餅花や飛驒の朝日が天窓に」色紙
大井雅人「雪に向き白瞑目の障子の家」短冊
廣瀬直人「夕暮れは雲に埋まり春祭」色紙

山梨県立文学館 開館三十周年の節目に

三枝昂之「山梨県立文学館開館三十周年記念賀歌 文芸の山なみをなお拓きゆく水澄む甲斐の深空のもとに」軸装

やまなし文学賞 小説部門 さし絵原画

増田実 画「ログアウト」単行本 表紙原画
増田実 画「ログアウト」さし絵原画 第4回
伊藤仁 画「息子」さし絵原画 第1・2・11・14・19・20回

井伏鱒二

井伏鱒二「まことによろし」軸装
写真パネル 井伏鱒二・太宰治の立ち寄った岩月家
写真パネル 甲府の歩兵第49連隊兵営地にて 1939（昭和14）年5月
井伏鱒二「げにわがために吾がためにわれは貧しくひとり咲く」軸装
井伏鱒二「さびしい庭にまつかさおちてとてもおまへはねにくうござろ 山空松子落幽人応未眠」色紙
佐藤春夫「杏咲くさびしき田舎川治ひや家おちこち入日さし人けもなくて麥畑にねむる牛あり」色紙
写真パネル 井伏一家の疎開した岩月家の隠居所にて
写真パネル 岩月家近くのぶどう園にて
井伏鱒二『仕事部屋』1931（昭和6）年8月 春陽堂
井伏鱒二『螢合戦』1939（昭和14）年9月 金星堂
井伏鱒二 岩月くま宛書簡 1945（昭和20）年7月12日
井伏鱒二 岩月くま宛書簡 1945（昭和20）年10月7日
太宰治 岩月英男宛はがき 1946（昭和21）年8月23日
太宰治『パンドラの匣』双英書房版あとがき原稿
太宰治 筆 領収證 1947（昭和22）年5月3日
太宰治『パンドラの匣』1946（昭和21）年6月 河北新報社（著者書き込み本）
太宰治『パンドラの匣』1948（昭和23）年6月 双英書房
太宰治 日本出版協会宛書簡 1947（昭和22）年4月21日消印
太宰治 岩月英男宛はがき 1947（昭和22）年5月1日
井伏鱒二 岩月英男宛はがき 1959（昭和34）年12月16日

岩月菊男旧蔵 初版本の世界

森林太郎『美奈和集』完 1892（明治25）年7月 春陽堂
森林太郎 訳『即興詩人』上・下 1902（明治35）年9月 春陽堂
夏目漱石『吾輩ハ猫デアル』上編・中編・下編 1905（明治38）年10月・1906年11月・1907年5月 大倉書店
夏目金之助『こゝろ』1914（大正3）年9月 岩波書店
永井荷風『すみだ川』1911（明治44）年 初山書店
永井荷風『牡丹の客』1912（明治45）年1月 初山書店
永井荷風『紅茶の後』1911（明治44）年11月 初山書店
北原白秋『邪宗門』1909（明治42）年3月 易風社

北原白秋『邪宗門』1911（明治44）年11月 東雲堂書店
北原白秋『邪宗門』1916（大正5）年7月 東雲堂書店
北原白秋『わすれなぐさ』1915（大正4）年5月 阿蘭陀書房
谷崎潤一郎『悪魔』1913（大正2）年1月 昶山書店
谷崎潤一郎『人魚の嘆き』1917（大正6）年4月 春陽堂
志賀直哉『夜の光』1918（大正7）年1月 新潮社
芥川龍之介『沙羅の花』1922（大正11）年8月 改造社
芥川龍之介『春服』1913（大正12）年5月 春陽堂
佐藤春夫 訳著『車塵集 支那歴朝名媛詩鈔』1929（昭和4）年9月 武蔵野書院
萩原朔太郎『月に吠える』1917（大正6）年2月 感情詩社
萩原朔太郎『月に吠える』1922（大正11）年3月 アルス
萩原朔太郎『青猫』1923（大正12）年1月 新潮社
萩原朔太郎『氷島』1934（昭和9）年6月 第一書房
室生照道『愛の詩集 室生犀星第一詩集』1918（大正7）年1月 感情詩社
室生犀星『抒情小曲集』1918（大正7）年9月 感情詩社
川端康成『伊豆の踊子』1927（昭和2）年3月 金星堂
川端康成『浅草紅団』1930（昭和5）年12月 先進社
堀辰雄『聖家族』1932（昭和7）年2月 江川書房
堀辰雄『美しい村』（A版）1934（昭和9）年4月 野田書房
堀辰雄『美しい村』（B版）1934（昭和9）年4月 野田書房
木下杢太郎『食後の唄』1919（大正8）年12月 アララギ発行所
堀口大學 訳『月下の一群』1925（大正14）年9月 第一書房
中原中也『山羊の歌』1934（昭和9）年12月 文圃堂
日夏耿之介『海表集』1937（昭和12）年5月 野田書房
日夏耿之介 訳『院曲撒羅米』1938（昭和13）年6月 蘭臺山房

河口湖の谷崎潤一郎文学碑

河口湖の谷崎潤一郎文学碑 建築用パース（完成予想図）1995（平成7）年10月
写真パネル 河口湖の谷崎潤一郎文学碑 除幕式 1996（平成8）年5月30日 撮影 中央公論社写真部

ギタリスト 深沢七郎

愛用のギター 瑞雲 1944（昭和19）年 古稀 1947（昭和22）年
写真パネル 石和温泉の旅館・糸柳にて 前列右が友人の曾根謙三、となりが深沢七郎
写真パネル 日世会第1回総会 1943（昭和18）年4月 甲運亭にて

作家の原稿

中里介山「著作権と模倣、剽窃、侵害」原稿
木々高太郎「巷の外交論」原稿
山本周五郎「狂い咲きの嬌女」原稿
山本周五郎「氷の下の芽」原稿
辻邦生「失われたものたちへのレクイエム —モスクワ芸術座『かもめ』の新しい美について」原稿
小川国夫「私は葡萄の木だ枯れない葡萄の幹だ」色紙

詩歌の世界

写真パネル 富士川町の萬屋醸造店・中込家にて
柳原白蓮「大自然のちからのまへに人の子は何をかおもはむたゞ祈るべき」色紙
柳原白蓮「みずからのため亡き人の為南無帰依法後世の提善もとむらはむ」扇面色紙
柳原白蓮「永劫のすがたとみればなつかしやそのいにしへの月天にあり」色紙
田中冬二「くずの花」色紙

田中冬二「魚狗来醬油造る頃なれば」色紙
 田中冬二「故園の菜」折帖
 高田敏子「紅色のつぼみふくらみさくらさくらあすひらく花の心」色紙
 高田敏子「萩の古木が千条の花房を咲かせるように」色紙
 大岡信「二三歩にしてわれが叫ばん」軸装
 山口青邨「初富士のかなしきままでに遠きかな」色紙
 阿波野青畝「葛城の山ふところに寝釈迦かな」色紙
 阿波野青畝「せきれいの叩く泉石ひきしまり」色紙
 加賀美子麓「木犀の金の匂へる子の熟睡」短冊
 野見山朱鳥「曼珠沙華竹林に燃え移りをり」短冊
 藤田湘子「君の子の健やかに秋深みけり」短冊
 杉山岳陽「産月の妻につくつくほうしかな」短冊
 林翔「竹馬に土まだつかず匂ふなり」短冊
 石原義澄「剪定の済みし葡萄の棚ごとに樹液光りて春めぐり来ぬ」色紙
 加賀爪あみ「ペンライトの光の海に飛び込んで私は波の一つのしぶき」色紙

俳句を通して交流を広げたい
 高浜虚子、飯田蛇笏、谷川龍之介

2020年
 1月25日(土)〜3月22日(日)
 休館日/月曜日(2月24日) 開館: 2月25日(火)

新収蔵品展
 作家のエピソード

高浜虚子
 飯田蛇笏
 谷川龍之介
 井伏鱒二
 太宰治
 深沢七郎ほか

観覧無料

井伏鱒二、太宰治が
 親しく訪れた甲府の岩月室

アロのギタリストとして
 活躍した深沢七郎

そのことばのつづきへ
 山梨県立文学館
 Yamanashi Prefectural Museum of Literature

